

# 蓮池薫さんから預かった

## 「復学願」

「北朝鮮に拉致された中大生を救う会」代表幹事

経済学部4年

篠田吉央

Shinoda Yoshio

合う夏。

8月21日

子供たちのいる新居で

「久しぶり、元気でしたか?」  
日に焼けた顔で微笑みながら、薫さんが現れた。そして、「復学の件ではいろいろお世話なります」。少し照れくさそうに頭を下げた。

薫さんの運転で新居を目指す。今回初めて訪れた新居は、国道沿いに建つ実家と違い、奥まった閑静な住宅地にあった。今年5月に引っ越した新居は、家族水入らずにはもってこいの環境。マスコミの目も届きづらい。この静かな環境が、一家に団欒をもたらし、予想外に早い薫さんの復学の決断をも促したのかもしれない。

玄関で薫さんの長女重代さんと、長男の克也君が出迎えてくれた。二人とも照れくさそうに笑っている。

「彼が篠田君、お父さんの大学、中央大学の後輩だよ」

そう言って僕を紹介する薫さんの言葉に、「中大生」という意識、復学への強く確かな意思を感じた。うれしかった。

8月21日。新潟行きの新幹線でシートにもたれながら、僕はこの数カ月を振り返っていた。

5月22日午前、赤坂プリンスホテル。蓮池薫さんは堅い表情で、小泉総理の二度目の訪朝と子供たちの帰国の報を見守っていた。

「生活が落ち着いたら必ず遊びに行きますから」。僕がそう告げると、少し表情が和らいだ。そしてその晩、薫さんは実に1年半ぶりにわが子との再開を果たした。

子供さんたちの帰国後、僕たち『北朝鮮に拉致された中大生を救う会』のメンバーは、薫さんへの連絡は控えていた。親子水入らずの静かな環境で、日本での生活を軌道に乗せて

もらうためだ。「そっとしてあげること」も、一つの支援活動だと考えていた。

7月—電話がかかってきた

「中大に戻りたい」

7月の終わりだった。携帯電話が鳴った。薫さんからだ。

「復学について話したい」

力強い口調に、一瞬耳を疑った。

薫さんが「フクガク?」

「中大に戻りたい」

「救う会」が活動を始めてから6年間、薫さんの生死も分からないことから、代々のメンバーたちがずっと待ち続けた言葉だ。それを直接本人の肉声で聞いた僕は、受話器を持

つ手が震えた。

薫さんからの「『ゴーサイン』に「救う会」のメンバーは静かに動き出した。膨大なファイルをひっくり返して、膨大なファイルをひっくり返して、関係者に電話をかけ、教授を訪ね歩いた。

そして、8月21日。僕は新幹線で新潟へ向かった。薫さんと会い、復学の具体的な段取りを詰めるためだ。柏崎駅に到着した。何度訪れても、街並みは変わらない。だが、状況は確実に前進している。

1昨年、薫さんの生死すら分からなかつた夏。

昨年、子供さんたちの帰国を祈つた夏。

そして今年、薫さんの復学を話し



「復学願」について大学との話し合い後の記者会見。兄・透さん（右）の隣が篠田=9月9日、駿河台記念館

僕も簡単にあいさつする。父親と  
はずいぶん年の離れた後輩に驚きも  
あったらうか、二人は少し気恥ず  
かしそうだった。

どこにでもあるありふれた家庭の  
光景。僕の眼にはそう映った。

くつろいだ雰囲気の間。テレビ  
はアテネオリンピックで一色だ。日  
本選手団の大活躍に、話は弾んだ。と  
オリンピック中継の合間に、ニュー  
スが挟まる。その日の午前中、薫さ  
んが行った市役所での記者会見が流  
れる。画面での薫さんの表情は硬い。

いま家族や後輩に囲まれ和んでいる  
表情とは、別人のように見える。い  
まも多くのカメラに囲まれ、マスコ  
ミと対峙するのは精神的に大きな負  
担なのだろう。

夕食。6人でテーブルを囲み、話  
が弾む。話を聞くうちに、薫さんの  
学生時代の話が僕の脳裏を巡った。

授業そっちのけで精をだしたアル  
バイト。指にタコが出来るまで囲ん  
だ麻雀卓。当時流行ったイーグルス、  
そして長髪。かけがえのない仲間た  
ち……。

「秋から大学生が3人になるの  
ね」

祐木子さんの言葉に、皆が笑う。  
拉致されてから26年。4半世紀ぶり  
の大学生活。それが現実のものにな  
ろうとしているのだ。

### 意思表示——決然と書き始めた

翌朝。ふと目を覚ますと、居間に  
は早起きした薫さんがいた。僕もつ  
られてそばに行く。どちらともなく、  
自然に本題に入った。

「薫さんの復学への段取り」——  
まずは、薫さんから中大宛に復学の  
意思表示をしてもらおう、というこ

とになっていた。  
薫さんといままで経緯を確認す  
る。

平成10年、薫さんの学籍回復を大  
学側に働きかけた「救う会」の歩み。  
そして、ご両親の陳情をうけ長内了  
法学部長（当時）の尽力で成った教  
授会確認の、三つの条件（①拉致さ  
れた事実の判明②本人の無事帰国③  
本人による復学の意思表示）が満た  
されれば、薫さんの復学が認められ  
る——との内容について。

朝食をはさみながら、僕たちは大  
学に対する意思表示である「復学願」  
の原案を練り始めた。

△昭和五十一年に入学した学籍番  
号76A×××××の蓮池薫です  
▽と自然に文章は始まる。そして、  
△子供の将来も考えて出した結論と  
して、まず私自身が母校中央大学に  
復学し、親として一生懸命努力する  
姿を子供たちに見せたいと思います  
▽。そこには中大生としてだけでな  
く、父としての薫さんもいた。

最後に、「蓮池薫」と署名。異国  
の地で24年間という奪われた時間を  
取り戻す、この日を待ちわびたよう  
な、力強い署名だった。

「次に会う時は中大生同士です  
ね」

別れ際、そう言っ僕は薫さんと  
握手を交わした。渡部一実・前代表  
幹事が「子供が帰国し復学する日ま  
で封印」していた、薫さんとの握手  
だった。

蓮池さんに託された「復学願」を、  
僕は翌日、秘書室を通じて金井貴嗣  
法学部長に届けた。

### 自然に迎えたい

1978年夏。書きかけのリポ  
トを残して、北朝鮮に拉致された一  
人の中大生がいた。異郷での24年間  
を耐え忍んで、1昨年奇跡的に生還  
そして今秋、彼の学籍回復が成った。  
9月24日、彼は26年ぶりに名実とも  
に中大生に戻った。

「お帰るなさい、先輩」

僕はそう言って自然に迎えたい。  
長い夏休みから戻った一人の学生を  
迎えるように。



「北朝鮮に拉致された中大生を救う  
会」のホームページアドレス

[http://www.geocities.co.jp/  
WallStreet/Stock/2416/index.html](http://www.geocities.co.jp/WallStreet/Stock/2416/index.html)